



2021 日本のうたごえ祭典 in ひろしま

企画ニュース⑤

発行 2021.9.16
祭典企画委員会

三上ワールド、参加者を魅了!!

遂に始まりました、三上和伸氏指導による「ひろしまへ」。

「こわしてはいけない～無言館をうたう」・「大地讃頌」等の指導で、多くの広島合唱団の心を揺さぶった三上先生のレッスン。この日を心待ちにしていた人も多かったのですが、コロナ禍によって、縮小を余儀なくされ、参加者各パート2名ずつという練習形態となりました。しかし、オンラインで50名以上の人々と繋がる事が出来たことは、せめてもの救いでした。

心に響くバリトンの三上先生ですが、すべてのパートを歌いながらの熱のこもった珠玉の言葉のいくつかをここに紹介します。



- ♪ 歌い始めは、ピアノの柔らかさを捉えながら柔らかく
プレスを長めに取り ピアノの前奏に入っていくつもりで
- ♪ 拍子を感じ、踊るようにリズムを取る ♪ 語尾は柔らかさを強調するように
- ♪ 「忘れさせてくれる」のくれるは、丸を描くようにふくらみを持たせ 歌い切らないように
原爆だけでなく様々な未来に向けての川や空をイメージして
- ♪ 「のみこんでくれる」とは、浄化されることである 胸を開いて柔らかく
- ♪ 女声「広島島の僕らも そうして」・男声「今まで僕らもどれほどの」は、歌うというより語るように
- ♪ クレッシェンドは、1拍ずつ輪を大きくしていくイメージで
- ♪ 「Ah～」は ハミングを連想しながら メロディーラインとのバランスを大切に ハミングは 丸く軽く



- ♪ 自分の声にバネがあると思い それを戻しながら歌う
ことで 曲や川の流れを失くさないように
- ♪ 「ちゃぶ ちゃぶ」はPを発音する
- ♪ ピアノと歌い手は ^{おんしよく}音色でハモるように etc.

熱気に満ちた練習の最後に、「『ひろしまへ』という曲は、なかなか捉えにくい曲ですが、私は、この曲のテーマはと問われると、『**普遍性**』と答えます。皆さんへの宿題として、何が普遍的なのか、考えてみてほしいと思います。」と、我々歌い手にその答えを託されました。

今回の学びは、オンラインで多くの人に届いたと思いますが、うれしいニュースが飛び込んできて、YouTubeにアップされるということでした。生の声と画像で「ひろしまへ」を体感していただければと思います。

(TF コーラス:松田雅子)

「ひろしまへ」について

「ひろしまへ」は、被爆 70 年に向けての取組として、米国出身の詩人アーサー・ピナード氏を書き下ろした詩に、西区出身の作曲家 中村 暢之氏が曲を付けたものです。

以下は、2014 年に、出雲市出身のテノール歌手 錦織 健氏がこの曲を発表したときのリサイタルプログラムからの両氏の言葉です。

僕にとって広島は、とても大切なことを教えてくれた先生のような存在です。今回はその先生と一緒に立って、耳を澄まし風景をじっと眺めました。

そして、広島がこれから、どのように教え続けられるのか、想像してみました。川のずっと奥の奥に空のずっと向こうにいる先生たちにも想いを馳せながら。

アーサー・ピナード

幼い頃、よく水遊びをし、釣りを楽しみ、夕焼けの景色を橋の上から眺め、川はいつもそばに寄り添い流れていました。歌詞にもある様にこの川たちはどれほどたくさんのものを運び、飲み込んでいってくれたことか……。

このうたがたくさんの人のたくさんの思いに繋がり広がっていくことを願ってやみません。

中村 暢之

～広島川～

三角州に広がる広島は、美しい川に恵まれ、水の都とも言われています。

「ひろしまへ」の歌詞には、「七つの川は流れながら……」とあります。かつての広島には、七つの川が流れていました。その川は、多くの涙を飲み込み、運んでくれました。しかし、度重なる氾濫により、人々の暮らしを脅かしてもきたのです。

そうした歴史を経て、現在は、人工的に六つの川となり、そのゆったりとした流れは、私たちの心を癒すとともに、時には、降り続く雨による濁流となって荒々しい姿を呈しています。

「広島川は、多くの涙を運び、忘れたことを忘れさせてくれる。その一方で、さまざまな記憶や記録を蓄えてきた。」「ピカと川は深いところでつながっていて、見つめていると、自然にピカのことを浮かんでくる」と、アーサー・ピナードさんは歌詞に込めた思いを語っています。(TF コーラス 松田 雅子)

